記事内容は執筆者個人の見解であり、すべての方への有効性は保証できません。

スクールソーシャルワーカーだより　67.3

ほりジイ

またまた
前号のつづきです

ＳＯＳを出せる環境が必要です

三学期、はじめの一歩

これまでわたしは不登校の子から、『勉強』『先生』『友だち』と言う理由聞きましたが、一番多かったのは『自分でも分からない』でした。

理由となるものが次第に強くなって、ついに「行きたくない」と感じるようです。でも多くの子が、「それくらい何だ」と言われそうで頑張ってしまうのです。

病は気から と言いますが、いくら頑張っても、心が体にブレーキを掛けるものです。理由を尋ねられても「分からない」子は、自分は大丈夫と信じ込み、困っていないと思っているのです。

それでもおとなは、自分の経験を基に「いじめか」「先生が嫌いか」と尋ねるものですから、子どもはつい、ウンと言い、連鎖反応的に具体的な相手の名前まで決まって行きます。

「勉強が分からないのか」という選択肢は滅多に思いつかれないようです。「勉強（学校）が嫌いか」という質問は、時々あります。

☆

『傾聴』の姿勢から見てこのような誘導尋問は、子どもの気持ちを大事にしているとは言い難いものです。こころを開けなくなり、一人夜中にゲームする子、課題を持ってくるだけの先生とも会わない子が生まれがちです。

「話せるようになるまで待つ」ためにしばらく、自宅で静養させてあげては如何でしょう。

★

パレートの法則という、ビジネス分野の法則があります。どうやらわたしが「2:6:2 の法則」と言っていたものと同じで、人の集まりを２割と８割に分けて見ています。

不登校の子の８割への対処法は、すでに書いた通りですが、残り２割には通用しません。なおさら、専門家への相談をお勧めします。

☆★

孤独又は孤立についてもう少し書きます。

孤独は決して悪い事ではありません。性分として、多くの人と一緒に居る事が苦痛な人、そこまではなくても、たまには一人で静かに過ごしたい人も居るものです。

しかし、孤立となると、話は別です。

自分の意志で選ぶ孤独ではなく、そうならざるを得ない事情があって、他の人たちとの関係が絶たれてしまうのが孤立です。いじめの多くもこの、孤立を原因としています。

そして、自分の力ではどうしようもない状況を、さらに、周りが認めないことによって孤立は深まって行くのです。

普段から、孤立しないように、子どもを尊重して見守り、孤立しかけた時に、ＳＯＳが出せる人間関係が大事です。